

〔論 説〕

社会交変換論Ⅵ

—取引原論へ〈未完〉を考え進めて—

長谷川 博

はじめに

ルソーとヒュームの往復書簡を素に、ルソーの一般意思概念の背景に迫った叙述があった⁽¹⁾。そして、揺らぎありルソーと揺らぎなしロックのちがいから一般意思概念を現代性化するかのよう「小さな公共」がいわれた⁽²⁾。また、ストックオプション制度ひいてはさしもの株主主権の規範化が理想理念だからではないとして「多様な普遍」が提唱された⁽³⁾。これらは、「個別—普遍」／「特殊—一般」というバイナリー・コードが称揚されてきたことからの脱構築である。と見做せるように、理論（モデル）構築の方法には、「個別—普遍」／「特殊—一般」にかかわるつぎがある⁽⁴⁾。①前提（原理、公理、公準といった「普遍／一般」化—筆者加筆—）から演繹し、「個別／特殊」からなる基礎的被説明項を説明する。②「個別／特殊」からなる基礎的被説明項についての理論（下位理論）を構築し、それらすべてをより包括的体系により整合させる。むろん、上記①にも②にも応じ、前稿⁽⁵⁾で述べた4転回（言語へ、行動へ、解釈へ、行為へ）以後を移し述べることになるが、「交変換」（トランスベクション）を基礎的テーマとし、つぎを〔様相的に〕基礎的な「説明—被説明」項とする。①「市場—非市場・組織（企業、行政）」₂の取引制度態様（モード）、②「生産—流通—消費」₂／「売手—買手」₂／「行為の3次元」〔「行動（統計的に有意な“what”=表象された属性・所与）—活動（世界に姿を現す what 以外の“who”・非所与・自己準拠性）」₂など〕の取引主体態様、③「モノ—コト」／「価値増大（使用）—減耗（消費）」／「所有一使用権」などの取引客体態様、④「シングル—マルチクロス」／「パワー行使—信頼／安心獲得」₂の〔オムニ〕チャンネル管理、そして⑤「資源—能力」／「希求—実現水準」₂の取引〔連鎖〕結果（成果）。

今ここにまとめるので上記のようになる専門的な視点にかかわる本論の主張が不自由にならぬよう、現代に彷彿とする「人文—社会—自然科学」₂をできるだけ辿りつづけてきた。間違っても辿りはしないということ（無反応）があるにせよ、生物学者が化学者がそして物理学者がそれぞれにそれぞれを辿る⁽⁶⁾のと、パラレルな面もあるからである。「学際／

(1) 山崎正一・串田孫一、1978年。

(2) 東浩紀、2011年。近年では以上を参看されたい。

(3) 岩井克人、2015年、258～323頁。H.チャン／田村順二訳、2010年、32～46頁。以上などがある。

(4) Hunt, S.D. 1983, pp. 9-17. 以上を踏まえていう。

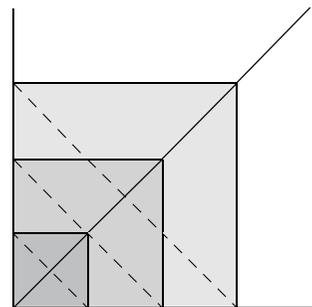
(5) 長谷川博、2017年、93～109頁。

(6) L. ダートネル／東郷えりか訳、2018年。

業際」的になりさらにトランス化するほど、いつの間にかかなり、「隠喩—換喩—提喩」が影響して認識論的に意味のズレが起きる内包と、「経験[証] (エンピリカル)—現実 (アクチュアル)—超越 (トランセンデンタル)」が影響して存在論的に対象 (オブジェクト) のズレが起きる外延がある。よって誰しもが、見えていると思える地平的背景に聳える「理論や実践 [から] の山々」を、2次観察も通じ昇降しつづけるか否かである。「内—外」₂ / 「主—客」₂ における「内₁—外₁」 / 「主₁—客₁」の1次 (FOL) 観察と、観察者の立ち位置の変化と対象のズレを伴う「内₂—外₂」 / 「主₂—客₂」の2次 (SOL) 観察があるので、観察には、両者を連立させた観察もある。再帰性 (recursion) と反省性 (reflexivity) についても、それらの2次化 (ダブル・クロス, DC) におけるクラス1 (C₁) とクラス2 (C₂) を峻別し、ネオ・サイバネティクスは、そのC₂として再帰性をいっていると考えている。

図1の原点は「提喩」、縦軸は「隠喩」(経験)、横軸は「換喩」(現実)である。そして、原点延長の対角線—再帰性のありなしだけで社会科学と自然科学を区分しなければ、両者それぞれの「再帰性ループ⁽⁷⁾」への素朴に鋭利なデマケーションといえる対角線—上にあるように思われる「実在」点として超越があり、基礎 [づけ] と審級を後述する⁽⁸⁾。というのは、実在的な類種は重複するかも知れず、同じ存在物であっても異なる類種に属す可能性があり、これらの類種に属す対象は、自然科学 (社会科学) により研究されるときには自然的 (社会的) な対象かも知れないとなるので、自然的な類種 (生物学でのタクソンなど) についても社会的な類種 (タイプ) についても実在論の立場がとれるからである⁽⁹⁾。また、直交しない平行四辺形の方がより一般的でいいが、正方形になるままで3つだけ網かけに濃淡をつけ描いた。その各正方形は山々の平面図になるが、それぞれの点線上下域を外延と内包に対応させていい。ただし、包被論では山々の関係は単に1元でも多元でもなく、構造論も導入し馴染みなメビウス輪やクライン壺⁽¹⁰⁾のイメージに、3次元的にはより捉えやすい地殻変動による造山運動のイメージが重なる。「理論—実践」上の定説の否定は困難だが、定説を肯定しただけでは論文としてオリジナリティが認められない。よって、さまざまに蠢き互いに矛盾する諸説が犇めくという動態がある。そして、「空」などと何と指示しようが「なくて (ありて) あり (ない)」という形式論理上の不条理である「第3項」の「排除—非排除」効果が、「理論—実践」を超えて浮上する。

図1 理論や実践の山々



コネクションニズムの見地に包摂できると思えるが、ヘーゲルの主観 (現象学) 寄りな弁証法は「両義性と無差別性の2重存在である第3項 (ファルマコン)」形成の第2過程に着目した上方排除であり、これに先立つ第1過程である下方排除が欠落しているといわれ

(7) D.R. ホフスタッター／野崎昭弘ほか訳, 1985年。D.R. ホフスタッター／片桐恭弘ほか訳, 2018年。以上は再帰ループの重要性を説いた。
 (8) J. ドゥルーズ／國分功一郎ほか編訳, 2018年, 11~117頁。以上に触発され言えることである。
 (9) Guala, F., 2016, pp. 132-145. 以上に基づく。
 (10) J. バロウ／松浦俊輔訳, 2000年, 286~290頁。

た⁽¹¹⁾。ただし、その下方排除は理論上「内なる外」であるという謂い—ならば上方排除は理論上「外なる内」だといったことになる—は、今後のわれわれが生態系よりも広いといわれている「地表」という観念論寄りな「地平」を存在論的に掘り下げられる範囲での概念からの後述する共生説も踏まえるほどになれば、メカニズム（組織 [間] 関係におけるシステムの一定現象を生起させる組織化された状態）を再考するときの部分教説を提供したと思わせられもしよう。よって、「行為—構造」／「目的—手段」等の連関を知るコツの掴み方について [行為論的に] 実感こもる再問題化としての“as”論を含むが、「マーケティングの基礎を支えるコンステレーション（知識や理解の連座配置・布置）」には、「基本開閉論としての包披論」が不可欠だと目してきた。そして、[断絶の間にある流動である] 取引について、「認識（『合理—経験』）—存在（『实在—観念』）」という盤上のn元論を踏まえたDCにおけるC₁とC₂とのC₂であるクロス・カップリング（CC）を、今はこれ以上ない説明としていう。

このようにいう途上で読み返した対話録⁽¹²⁾では、ひとつの地平をベタベタと歩くだけでなく、「1—多」／「単数—複数」—本章冒頭の、小さな公共は「単数の多」であり、多様な普遍は「複数の1」といえる—の問題が夙されていた。その対話録中にあった「バター」という表現は、つぎの物語の核心（「ミクロ₂—マクロ₂」／「個体（ \cap 行為）₂—制度₂」）を、「対象₂—メタ₂」において言い切ったのであろう。虎たちが少年から剥いだ身ぐるみを奪い合ううちに美味しそうな「ギー」というバターになったという、絶版理由が『カルピス』のロゴマーク変更へも波及し物議を醸した [幼児童向け] 物語をご存じのことだろう。また、「脱兎は狐より速く走る必要はない。他の脱兎よりも速く走ればいい」という生物学での謂いもあった。こうした謂いが、つぎへの言及以後に尚更けだし名言だと思繹（ \cap 非経験的な思弁）できる。①標準以後の進化論やシステム論⁽¹³⁾、②モダンの螺旋化に対するポストモダンのリゾームも3項動化的に踏まえた間主体性行為論⁽¹⁴⁾、そして③「道理（「反合理—合理」）—公理系」／「ヒューリスティクス（不可知寄り）—アルゴリズム（可知寄り）」におけるマージナルなコンセプト化論⁽¹⁵⁾。しかし、バター（虎たち）を口中にしたその少年は、「神々は死んだ（個が勝った）」といえただろうか。他の脱兎を口中にした狐は、逃走しきった脱兎に向かい「神は生きている（個々は負けた）」といえるのだろうか。その一方、「個別者である少年（脱兎）—神出鬼没な超越者である虎（狐）」は、「個別—普遍」／「特殊—一般」での闘争（優勝劣敗を一部とする生死勝敗）における普遍者と個別者の相属そして非ゾンビ化⁽¹⁶⁾（非偏狂化）—2018年になっても未だ生じたが説明の足しにならない「近接化／中性化」をいうのではなく—への示唆を、先取りしていたと考える。

そして、「自然科学でいう理論負荷性—社会科学でいう遂行・実践負荷性」を通過し、

(11) 今村仁司, 1992年, 117~136頁。以上に基づく。

(12) 柄谷行人・岩井克人・浅田彰, 1983年, 222~256頁。

(13) 長谷川博, 2013年, 41~61頁。

(14) 長谷川博, 2017年, 93~109頁。D. チャーマーズ／林一訳, 2001年, 128~135頁。

(15) 「理論—実践」／「定言—仮言」的規範にかかわるが、別の機会に公開予定である。

(16) D. チャーマーズ／林一訳, 2001年, 128~135頁。

さまざまな「演繹—帰納系」／「非表象（非認知）—表象（認知）系」における少なくともつぎの倒（交）錯関係を踏まえて仮説発見になる。①「人文—自然科学」のちがいに言及する「認識—存在論」／「客観（「3人称」）—主観（「1人称」）」⁽¹⁷⁾、②よって「自然の自然—社会の社会」⁽¹⁸⁾をいい始める者は第2の「自然—社会」（「自然₂—社会₂」）を説明しようとする。そして③数学が2000年がかりで「クラインの4次元」へ辿り着いて以来またぞろ数理が追っているといわれたことだが、「競覇原理」（弁証法的螺旋のシステム）と対する「非競覇原理」（米国版⁽¹⁹⁾）としてもいわれた脱構築的螺旋の非システムについて「回帰／進歩」がいわれたこと。自由置換視点と同じ眺めをもつといえる「複眼の士」⁽²⁰⁾がいわれていた。このことを、よく見れば、認識は否定できても存在は否定できないのであるから、上述の存在論的構造モデルの背景といえる。ここでは、西田哲学以後に東洋哲学と仏教に言及し、素朴実在論者を凡夫といえども、素朴反実在論者をも同然凡夫だとはいわなかったが。その西田の「逆限定」をいう池田と、「内部（外部）の内部（外部）が外部（内部）になる」をいう福岡との相互承認が、ビジネスライクには小売業態においてもある「逆輸出入」そして「誤差逆伝播」もいえば早まったのではないかといいたくなる面はある。しかしながら、「年輪」の例えから「自覚を要する」包被論を分かり易く説こうとして、両者による上梓がなされるまでになったのである⁽²¹⁾。

非素朴実在論者と非素朴反実在論者の内的関係による相互浸透が、2次観察されることによる相互包摂の「螺旋化をいう」包被論は、「法則定立／モデルで表現するメカニズム探求」に向かう科学なのである。定向的变化・発展をいう「進化—非進化論」的なものである弁証やレヴィ＝ストロース以降の構造主義⁽²²⁾にしてみれば、予定外の不時着であるが、「バイナリー・コードの複数ペア」間に亘るコードの変換操作による地滑りの横断への熟達化がなされれば、これはまたも人類学由来で「第3の方法論」が生じたことになろうといわれた⁽²³⁾。ただし、それが偏に人類学の所産だとされれば、そうではなく炙り出されることの所産でもあるとっておく。この先着争いの先（上記の予定外の不時着が先とは言えない離陸）にあることは、回帰や進歩も同時生起する見事な循環を「螺旋」という論⁽²⁴⁾を、外からは観察できず1人称にも3人称にも還元できない円環（ループ）のことをいう「2人称的観点」⁽²⁵⁾があるだけでも2次（SOL）があるので、円環的に見えるようでも「開₂—閉₂」系になっている「2重螺旋」だと、本論では表現するわけである。

2重螺旋仮説の包被論は、帰納からの抽出も待つが⁽²⁶⁾、つぎを演繹的に抽出する。①地「平C表」を射影し切れない図ともいえるが、その説明／了解に必要な「認識—存在論」₂の盤を最上位とするマトリクス（コダブル・クロス）。たとえば、三位一体（一神教、産

(17) J. R. サール／山本貴光・吉川浩満訳、2006年、177～208頁、146～176頁。

(18) N. ルーマン／馬場靖雄ほか訳、2009年。

(19) R. ローティ／富田恭彦訳。2014（1988）年。彼は、ネオ・プラグマティストである。

(20) 井筒俊彦、1989年、1～102頁、191～246頁。

(21) 池田義昭・福岡伸一、2017年、96～147頁。

(22) 石倉敏明、2016年、311～326頁。以上的人类学地図を参看されたい。

(23) 清水高志、2016年、250～265頁。以上に基づく。

(24) Clarke, B. and M.B.N. Hansen, 2009, pp. 83-99.

(25) S. ダーウォル／寺田俊郎監訳、2017（2006）年。

業資本、国民国家)をいううちにある「1の原理」が前面化するほど背面化されてきた「多の原理」の基礎である「見えない大地」の働きをしているマトリクス⁽²⁷⁾。論理実証主義ではなく論理経験主義の影響を受けてはいるが、仮説の現実性を問うか問わないかということについては、両方ありである。②「無₂—有₂」としてのいくつかの「空」—空と無は道徳と倫理の場合と同様に語の出自は異なるとされている—の入れ方。電車の中で何故かよくやっていた、4×4の16マスから1コマ抜きプレイするモバイル・アナログ・ゲームがある。「n-1」⁽²⁸⁾も想起できようがこのゲームのように「動きのない世界」の呪縛を解く、あるいは「動きすぎる世界」の呪縛を解く場合でも、空さえ実体となり入ったとみる空の入れ方をいう実装が、自然科学でも考えられている⁽²⁹⁾。そして③「分っている—いない」／「できる—できない」の中にある「あなた—私」における差違のズレと差異的ズレ—内での差をいう「違」と外との差をいう「異」を踏まえ⁽³⁰⁾、上下、前後、1多など毎での違と異の重合も意識し差違(差異)という—からのブレやハズレに対しての、「メタ・マネジメント—マネジメント」／「[デイス・]コミットメント—[デイス・]エンパワーメント」。

以上から、クロス・カップリング(CC)取引論を、主にコネクショニズムの「応用の応用」論といえる上記③へという具合である。それにはまず、どういう理解があれば「マーケティングの」世界を大まかにせよ分かったことになるかとなるので、「経験[証]—現実—超越」₂⁽³¹⁾というDCⅡを、上記①や②を通じてどこまでいえるかである。

1 「経験—現実—超越」のダブル・クロス

図1の山々は、「テクノロジー(物質に宿る科学技術)—スキル(心身に宿る技能)」／「サイエンス—アート」／「教養—専門」／「理論—実践」という諸区分の山々と言ってもいい。ただし、as論(実学論)的には、その山々をひとつずつではなく、尾根つたいに登下する。このとき、諸区分に「必要／十分」な時間長差などの鞍部(山の尾根の窪んだ部分)から、ある区分がある区分に譲るかのように目的論へ入り込むので、理論家でも実践家でも、そこから1つの山を下りるときがあろう。以上は、つぎの適応度地形論を想起していう。過度の適応により局所的適応にはまるので過度の特殊化はよろしくなく、少し遠くから眺めてチャンス(山(尾根)や丘の全体を見渡してよりよい所に辿り着くには、適応度の低い所まで敢えて降りてもいかなばならないときがあり、最適を信じないということ学ぶことである⁽³²⁾。つまり、社会科学で馴染みな「適応が適応を排除する」とい

(26) T. ピケティ／山形浩生ほか訳、2014年。以上が帰納した「 r (資本収益率) $>$ g (所得成長率)」が経済学の仮説演繹体系に影響し周知の論争を巻き起こした。あるいは、2%の遺伝子を除く98%のDNAはジャンクといわれてきたがむしろトレジャーだ、また親から子への遺伝においてすらその98%に「突然」変異があるという発見の報道がある。

(27) 中沢新一、2004年。マトリクスにかかわる数学的基礎への言及もある。

(28) G. ドゥルーズ・F. ガタリ／宇野邦一ほか訳、2010年、15～61頁。

(29) 郡司ベギオ—幸夫、2010年。85～140頁。

(30) 山口昌男、2000(1975)年、iv～v頁。

(31) Bhaskar, R., 2008, pp. 12-20. 以上に基づき変更。

(32) Hardin, G., 1965, pp. 258-299.

う凝縮された謂いもあることであり、これを再考するには、価値前提と事実前提への適応度として目的論（テレオロジー）の「形式論理—非形式論理」₂を踏まえる。ただし、重合性が存在するという関係論者と重合性に向き合わない関係論者とは、「1次のディレンマー—2次のパラドクス」／「回避—包摂」／「回帰—進歩」／「自然選択からの適応（原因からの結果という大枠決定論での自由）—非適応（共生）」でのちがいがあがる。そこで、多領域の英知を結集した関係〔論〕の組み直しを、市場がますます見えなくなる小手先の結果主義ではなく、帰結主義志向として変わりなくいう。

科学者は「原因（コーズ）」に関する「説明」と「了解」の両方を使うという⁽³³⁾。その後者は、すでにして「理由（リーズン）」である。たとえば、「 $0! = 1$ 」という数学の定義にしてすら、 ${}_n P_k$ から解き明かそうとするにも循環があり説明的というよりは了解的であることをもってしても、そうだと納得できよう。〔因果〕推論には、つぎがある⁽³⁴⁾。①直接原因を探りその結果がどうなるかを答えられる場合の断定型。②そういう断定ができない場合に諸原因の段階的蓄積により幅をもたせて結果をいう確率型。そして③サイバネティクスがネオ・サイバネティクスへとポリリッシュされるのにも役立ってきたカオス理論（非線形力学）、自己組織性論、ネットワーク理論の3者、そして原因に対する理由の論—筆者加筆—が、「実験的手法による必要／十分な『説明』—修辭的な手法による『了解』」に用いられている創発型。上記①と②の違いは、ノンパラメトリック（再参入なし）かパラメトリック（再参入あり）かである。上記3者と理由論に既には述べたこともあるが、上記②と③には、変異（組成上の再配列）における断続性（ジャンプの内実として非線形）を前面化するか否かの違いがある。

「文化ハイブリッド／拡張遺伝子化」は、「文化子₁—遺伝子₁」に対して「認識₂—存在₂」の再帰性を取り込んだ「文化子₂—遺伝子₂」に同定できる（図2）。ゆえに、この意味で「個人₂—集合体₂」を掘り下げれば少なくとも「文化子₂—遺伝子₂」を孕む「場」（物理的空間を伴えば「場所」）は、「対話—会話」／「差異（差違）—同一化」を介し「因果性が変質する」ことにもなる過程である。〔因果〕推論のうち前段①や②では捕捉しきれない場〔所〕こそいう社会（「人文₂—自然₂」）科学にとっては、その断続性にある非線形性に真摯に向かう点で、前段③はより精緻化した情報を獲得する〔実用的〕手段として〔実証主義者にとっても〕有望である。〔飛び越せない〕断続性を飛び越すようにまでする線形化の類は、プラトンの髭には意外に速く立たなくなるオッカムの剃刀である。機械論は、自然（社会）

(33) K. ヤスパース／西丸四方訳、1971年、179～188頁。

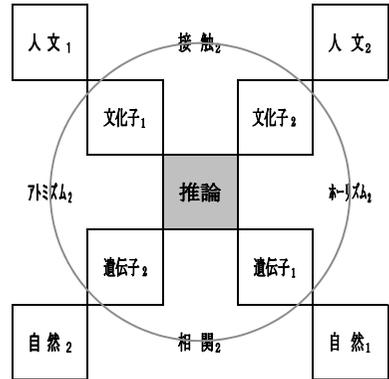
(34) 事物の「原因」には、未だつぎの3問題がある。①唯一の定義がない、②時間経過や文化により理解が変わる、③原因や因果の存在を誰も証明や反証できない。ゆえに、アリストテレスに由来する現在のつぎの原因概念区分も精緻化され、因果性概念は変化し続けるという。①発生を促す原因、②発生させる原因、③プログラム上の原因（アリストテレスの形相因）、④意図による原因。そして、自然科学は上記④を排する傾向が強いが、認識に新しい道を拓く探求姿勢をつぎだという。①観察の反復、②仮説を支持する肯定的結果と否定的結果の統合、③「自由—共生」の科学観もしかり—筆者加筆—権威への懐疑。そして、そういう姿勢からつぎの諸前提が成立するという。①過程の説明力を高めるよう因果性概念をより妥当化する、②因果関係について「相対—絶対」／「論理—存在矛盾」という問題があるが「原因」は発見可能である、③社会科学では時間は過去から未来に流れる、④素朴な科学主義者がモデルとしては矛盾だといっていた「補完的な複数の因果性（メカニズム）」がある、⑤どの因果性モデルを適用するかは対象事象により使い分け得る。P. ラビンス／依田光江訳、2017年、9～66頁。以上に基づく。

現象における所与（与えられた事物）を人間なりが再現するとき枢要な方法ないし手段となってきた。何故かを問うとはつぎを意味する、とはいう。①その出来事はどのような目的／理由に役立ったか、②以前のどのような状況（前件、原因、生成メカニズム）がこの出来事を惹起させたか。①への応答は目的論的理解／説明、②への応答は機械論（目的律）的理解／説明である。ただし、1GBのヒトゲノム情報量を遥かに超える脳活動を経由する推論上で、社会が機械的に動いているとは必ずしも理解／説明されていない。にもかかわらず、社会は〔過不足に〕機械的だとの錯覚に囚われているならば、その認識の解体が、やはり批判にとってかなり大仕事にはなってきた。

さて、既述の4転回等によって発散されるさまざまなコードが収束するとは謙虚に言い控えるべき場合がある。というのは、以下のことからである。存在はコミュニケーションをコミュニケーションするので、曰くつきの言語によるコミュニケーションこそが社会の構成要素であり、コミュニケーションの知覚や解釈は構造カップリングと「象徴的一般化メディア」（真理、愛、所有権、貨幣、権力など）に基づいているという⁽³⁵⁾。ただし、その象徴的一般化メディア—主語になる「原情報メディア」ともいえる⁽³⁶⁾—では、その所記の述語となる既存バイナリー・コードの一方だけでのデフォルト化、あるいは実は C_2 の種になるような辞書にすら正反対の意味をもつ語が生じれば、瞬く間に「概念／コード化」の共時的理解限界という浮遊化を踏まえねばならなくなる。つまり、「内包（性質の束をいう定義）—外延（定義を反証可能にする性質担体の例化である個体の束）」による概念や、「その内包と外延の固定化である所記—その所記を意味する能記」によるコードには、「概念₂—コード₂」（「明号の暗号—暗号の明号化」）もあるということである。

〔白の女王が来るまでは〕少なくとも赤の女王もどきに共時態内で経験数一定に保つ C_1 （「内₁—外₁」など）の景色を表出する言葉は、 C_2 （「内₂—外₂」など）の景色を表出しきれないか逆にブレーキになるので、当該時点の人間知能（HI）と取ってアナログ的に言えば手旗信号夫である人工知能（AI）—「強いAI⁽³⁷⁾」に対する「弱いAI」ほど実は C_1 者—とでは、多変項クロスで聞き続けようが言い澁む。ならば、「弁証上の区分／その区分の脱構築上の区分」のDCにより C_1 と C_2 を連立化して、効率化できるだけの境界₁から得られるのとは別の境界₂から自律的に有効な情報量を増やし、CCによって「背景」（フロイト的「無意識」以後、流動的知性、科学実在論にある「実在の内在一外主義」₂）や「ビジョン」の相互包摂を、どこまで追究できるだろうか。ここまで来ているので、そうした4転回等を嫌というほど踏まえてきたプラグマティズムは、ネオ・ネオ以上のネオⁿになっ

図2 推論と文化子と遺伝子



(35) N. ルーマン／馬場靖雄ほか訳、前掲書、74～126頁、335～452頁。以上は、パーソンズとの論争以後、いわば「青い鳥」だと多大に着目された社会の捉え方。

(36) 長谷川博、2001年、305頁。

(37) Searle, J.R. 1980, pp. 417-424. R. ペンローズ／林一訳、1994（1989）年、3～35頁。

ている。なお、本稿とファスト・サイクル化して執筆中のことではあるが、機能〔論〕が介在する合理性論を揺さぶる感情論の近年動向—感覚からの知覚の経験蓄積をいう悟性論、そこに意味〔論〕が介在する知性論を経るが—、そして文化資本論と持続可能性論は、以上にも沿う。

機械論が部分的に妥当する以上の「社会の社会」から観念や理由を排除しきろうとして、実学的にどうなる（する）のかになるときまっている。人間の観念や理由を、AIにお任せでもするのか—理神論的になるが恩寵とするか劫罰とするか—。生物学的な「DNA—システム決定⁽³⁸⁾」という拡張遺伝子論や工学等の進行形が、社会科学に存在論的に影響している。そして、「〔脱〕人間中心—〔脱〕非人間中心」の相克である〔多様性〕原理は、「諸生物—他存在（AIロボットなど）」／「垂直—水平」におけるすべてを人間経由で考えれば済む段階にあるのかという「様相」を呈している。ここには、過去よりも急速な、つぎへの反応がある。つまり、ポスト・ヒューマンとAIロボットはエンカウンターしないというあらぬ方向への現実認識が、不屈な競争原理の揺らぎを自ら招いているということである。だからこそ、「観念—実在」を引きずる認識論と「合理—経験」を引きずる存在論という未完さにおいて、人文₂や自然₂がないと、人文₁や自然₁すら宙吊られ危うくなる。社会科学にとっての批判的实在論の核心は、ここにある。

コト（モノ）がモノ（コト）へと錯視される事態である物象化（心象化）が入り込む観念論批判から認識論へ、これと軌を一にした理由の原因化へという流れは、それが科学化だと定説化されるほど固い決定論の優位を招いた。その背後には、実体概念も本質概念と同じように形而上学的誤謬であり、言語的な便宜に過ぎない主語と述語とから成る文章の構造を世界の構造にまで移行させたことにその原因があるのだ、という実体（本質）論批判が西洋でこそあるにはあった⁽³⁹⁾。しかし、科学においても、人間に「主観」がないと「客観」はでないの、〈主観〉や〈客観〉へは未達だとなっている。そこで、「経験—現実—超越」₂の存在論では、西洋近世の最初で最後の問題である「主観—客観」よりも「有—無」を一層根底的なものとして、「実体（実在）の本当の名は実在（実体）」／「実体対象—実在対象」を、「中動態—中観論」により説明しようとするのが、西洋が東洋を説明する「オリエンタリズム」⁽⁴⁰⁾ではなく、東洋が東洋を西洋に説明する「批判的オリエンタリズム」として、西洋にも広がっている。このことはCCの再現の一部である。中観派は、「縁起」（相依性・相互依存）→「無自性」（本質がないこと）→「空」、という流れに逆はないと立論した上で、その3概念はその流れがある限りにおいて結局は同義だとはいう⁽⁴¹⁾。これが、あらゆる文化類型から自由に、「非物質的な『自然』—物質的な『自然』」とは何かへの回答だったと採れば、そこでいう「四句分別」が「有—無」₂のDCに、有部存在論がそのC₁に、無部存在論がそのC₂に対応する。

(38) システム進化論的生物学には以下がある。U. アロン／倉田博之・宮野悟訳、2008年。以下では自己拡張共生としてのロバストネス、生化学反応におけるFFとFBの言及もある。近藤滋ほか、2010年。

(39) B. ラッセル／市井三郎訳、1970年。204～205頁。以上に基づく。彼が提唱者した記述理論とは、自分が何を言っていたのか、どんな信念や義にコミットしていたのか、そしてそれらの真偽を知るにはどんな条件の満足化が必要か、ということが分かるとして言語表現下の論理構造分析に挑戦した理論のこと。A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル／岡本賢吾ほか訳、1988年、210～229頁。以上を参看されたい。

(40) E. W. サイド／今沢紀子訳、1993年。

以上からすれば、「所与／原因化」をいうほどの C_1 、「超出／理由化」をいうほどの C_2 であり、「所与／原因としてはあなかった事物が、超出／理由にはすべてある」という論法—無用の用、中立選択、DNAのジャンクがトレジャー、も例外ではない—が甦る。そして、生態学等が「人間がいなければ今の自然はなかった」との有限性をいえば、その人間の「祖先以前の始原（無限性）をいわねば結局は世界の50%は人間由来になる」と有限性の後⁽⁴²⁾をいう両者の基礎づけ論を、CCは包摂化する。ゆえに、CCが導出する中間公理（道理）—サイズの「中範囲」ではない—は、「価値—事実」を前提に綱を引き合う基礎づけなしに、基本開閉論（包摂論）に基礎づけられている。こうして「基礎づけるもの₂—基礎づけられるもの₂」にある基礎は、「素朴／局在／中期」な「促進／制約」づけから偶さか提示される「中間という名の最終」解（答申）を「後の判断のために実現（経験一定則上のエントロピー放出）的」に踏み出すのとは別の仕方で、我々を突き動かす「終わりなき問い（課題）」として定立され、価値も事実—両者の2分法をとるのは反実在論—すらも選択するものではない。

STP⁽⁴³⁾やマーケティング・ミックス（4P）にしても、バージョンアップ—ここに概念拡張側面があれば未だ少なくとも異論は出ようが—されているので、それこそ未だ永遠に基礎なのである。また、超越（経験を超出した現実以外の何事かの「状態—状況」、主体性の本質としての自己の2重否定運動・営為）にある過（余）剰な含み（絶対的確認が不可能な神話、脱神話的でありながら神話化する「集合体₂」寄りの理性）を排そうとして、「通常感覚で現実以内のもの」として言われる審級（基礎についての権威、[法的]超自我）がある。ただし、審級化すれば世界の舵取りにさえ大きく影響する「社会的諸限界を超える発展的展望として論じられた選択肢」のうちで、三方よしとは言い難いビジネス余剰への懐疑を始めれば立証責任を伴うが、これも批判の大きな仕事でありつづける。

たとえば、マーケティングの背景となっただけに止まらないが、人類時間長での負荷からの「天然」資源の枯渇時間長や排出吸収力の捉え方⁽⁴⁴⁾に対する異論は、[事]物は「無秩序になるしかない」というエントロピー原理と「放出／拡散／希釈」による「自生的秩序—局所的秩序延命」を仕事とする自由エネルギー原理についての自然科学に由来する。

[不]適正ということに安易な一致はありえないが、処分後のものもシンク（吸収）していくソース（供給源）でありトランスベクションの起点といえる「製品以前のもの」（図3）が、人間以前の過去形に対し人間以後の進行形が混入しその意味が曖昧になる「天然」資源—人類の絶滅後にしか〈天然〉はない—である。同図は、マーケティング[の客体]を

(41) 中村元、2002年、158～284頁。以上に基づく。中観派は空性論者を自称し、不二論者と他称されるともいう。桂紹隆・五島清隆、2016年、117～173頁。以上では、龍樹の論法には大別するとつきがあるという。①枚挙法により諸命題を挙げそれを帰謬法ですべて否定する、②2つのものの関係を最終的には2つの対立概念の相互依存に還元し無自性・空を明らかにする。

(42) Q.メイヤス／千葉雅也ほか訳、2016年、9～52頁。以上に基づく。なお、ロック由来の「1次—2次性質」という区分がもはや取り返しがつかないほど失効したともいう。

(43) Weinstein, A., 2004, pp. 155-177. たとえば以上がある。

(44) D. H. メドウズほか／大来佐武郎監訳、1972年。以上は以下に亘り更新された。D. H. メドウズほか／茅陽一監訳、1992年。以上では、政治的言語の中でも共有は禁句ではなくなったという。D. H. メドウズほか／枝廣淳子訳、2005年。

その過程において理解する出発点になる。また、「競覇—非競覇」／「競争—協働」／「個体内共生（エンドジナス）—個体間共生（エクソジナス）」にかかわる「超」組織個体现象であるトランスベクションを、「所与／原因」と「超出／理由」の再帰的ループもある「経験—現実—超越」₂の視点でみる際には、「人間らしさ」にもかかわる以下の4点が基礎だと重視する。

そこで第1に、遺伝子の「突然」変異⁽⁴⁵⁾だけでは生命進化を説明できないので、既述の第3総合に至る自然選択説を補完するとした「細胞₂—地表₂」からの共生説⁽⁴⁶⁾が、「言語依存₂—独立₂」から新しい個体論（主体論）をいうことにも繋がるとして注目できる。というのは、ともかく、つぎのようにいわれてきたからである。遺伝的变化と表現型「機能」にかかる選択の結果として進化を捉える適応論者は、つぎの問題に突き当たってきた⁽⁴⁷⁾。①認識論だけでなく生物学の知覚研究においても、客観的環境（「環—境」）をシステムから独立して知覚することは不可能であるとされている。②環境が変化してきた中で、表現型に選択のかかかっていない生命システムが現に存在している。③環境が変化していないのに、変化した生命システムが現に存在している。上記①に関しては、医学でいう身体内情報の感覚系である固有知覚をおそらく—ここにも言葉が介在しないとはいえないのか—は除けばということになるだろうか、つぎの捉え方については既述したところである。2者—ときいて元の本阿弥の2元論だと思えば、学習も適応もあるようでない2者になる—というが、それらがひとつの組織だった全体（各「機能環⁽⁴⁸⁾」というメカニズム）に関係づいているのは、その2者間の対構造に発生する記号に、双方自体（そのもの）ではないからこそその真があるので、生物は学習し適応的たりうるといわれたわけである。

「細胞₂—地表₂」からの共生説は、1つの生物種にとっての大事な環境をいう環界論が裏返せばいっていったと解せるある生物種の末路（絶滅）も含みつつ、絶えず新しい環境や新しい生物をつくりだしている調節された地表を引き合いに出した弱ガイア仮説に基づく。生命の定義次第では再評価される向きもあるといえる強ガイア仮説（弱ガイア仮説前の分子生物学者が半ば嘲笑してきたガイア仮説）とは異なるが、ともかく弱ガイア仮説は、既存種に属す生物間の共生的合体による新種をいうネオ・ラマルキズムである。その上で、異種の生物が物理的に接触（共生するパートナーの共生体は、同じ場所と時間のなかで、文字通り相手と接触し、ときには内部に入り込むことさえある）することで、それぞれが懸命に生きようと、時には闘いながらも、そうでなければ生きられず結局そこに落ち着いた生き方—ともすれば「相手を思いやる」というだけの俗流解釈に利用されやすい相利共

図3 製品とは

	流通なし	流通あり
生産なし	製品以前のもの	流通あり即製品
生産あり	生産あり即製品	狭義製品

〔出所〕 長谷川博, 2007年, 「製品政策」『マーケティング3級』, 中央職業能力開発協会, 135頁。
以上の図を一部変更。

(45) 日本遺伝学会編, 2017年。以下などの新訳出の提案がある。mutation [突然] 変異, variation (状態多様性, 過程多様性・変動性)。

(46) L. マーギュリス／中村桂子訳, 2000 (1999)年, 5頁, 13～23頁, 173～198頁。細胞内共生説は分子生物学により立証済みで高等学校の教科書にも載っているという。

(47) S. F. ギルバート・D. イーペル／正木進三ほか訳, 2012年, 298～324頁。以上に基づく。

(48) J. ユクスキュル・G. クリサート著／日高敏隆・羽田節子訳, 2005 (1970)年, 11～26頁。

生だけではなく、片利共生、寄生、そして片害共生も含む一をいう。ただし、ヘッケルの系統樹から分子系統解析へと発展した進化系統樹における生物種下の個体としていう生物内外の細胞内へと生命起源の微小化—これは、類人猿からの進化がいわれたことの奥底にある獲得ゲノム遺伝による微小世界からの進化的変化をいう「共生発生論」に遡るとい—をいう「連続」細胞内共生説の学説史からの科学的検討がある⁽⁴⁹⁾。

第2に、自然の文化化（アプロプリエーション）という人間中心主義の表象や脱人間中心主義の表象という2つのドグマを、「中心—周縁」₂／「類似—異質」₂として再考できると、つぎのことから考える。すなわち、人間中心主義の世界観に立てば身体性と内面性という2元的区分（図4）からの4類型は、「遺伝子—文化子」の「共」進化（進歩）コードを問題にした理念型としての文化区分を、歴史的により具体的に示した⁽⁵⁰⁾。ただし、非人間中心主義の世界観に立てば、[強ガイア仮説もどきに]自然の後述するテレオノミーを認める立場からはトーテミズムとアニミズムが、環世界論の立場からはナチュラリズムとアナロジズムが相対化される、ということである。

一方、文化の伝達（ハイブリッド化）のメカニズムについては、[価値ある事物の]表象や考えの疫学的伝染論があり、文化に関する曖昧な疑問を実行可能な研究プログラムへと書き直す枠組みを提供したとされている⁽⁵¹⁾。ここでは文化を、情報伝達体系として遺伝子（固定された遺伝子概念）寄りではなく、つぎの2クラスでの発生があるとし、集団中の認知（「=知覚」とされた以後の認知科学）とコミュニケーションにより湧出するものとした。

①純粹に心理学的な思考や記憶の個人内過程、②部分的に心理学的であり部分的に生態学的であり、ある主体の諸表象が共有の物理的環境を限定／修正するための変更により他主体の諸表象に影響を与える個人間過程。そして、デジタル時代の「コミュニケーション／エコノミー」となり—SNSにも「肯定—否定」₂の種差があるようだが—、技術論的に「中心（1）を超える周縁（多）」になる信・メッセージの「発信者と受信者の区分があつてなくなる」という拡散現象は、「中動態の再現」に他ならない。よって、つぎの論議の火種を絶やさぬ方がいい。①未完な「国家—市場」論を進み価値ある事物の表象が価値から乖離するというシミュラクルに根づく市場寄りの制度論（たとえば仮想通貨による銀行制度論）、②上記①の現象に始まり、主義の1次（FOL）的な分裂とは「『意見の分離+対話』がさらに生む分極化」であるからもういいだろうとして進む2次（SOL）の「重合」（「統合」という手垢に塗れたロゴス語に内包された1次的ジレンマの包摂）とのCC（2次的パラドクスへの対処）。

図4 存在論的文化4類型

		身体性	
		類似	異質
内面性	類似	トーテミズム	アニミズム
	異質	ナチュラリズム	アナロジズム

[出所] Descola, P., translated by J. Lloyd, 2013. *Beyond Nature and Culture*, pp. 233. 以上の図を变形。

(49) 佐藤直樹, 2018年。

(50) P. デスコラ／難波美芸訳, 2017 (1996)年, 27~45頁。以上は、自然と文化が直交する古臭いグリッドの放棄に言及した。ただし以下は、デスコラの4類型（トーテミズム、アニミズム、ナチュラリズム、アナロジズム）から、世界観総体の言及に向かった。M. セール／清水高志訳, 2016 (2009)年。

(51) Sperber, D., 1996, p. 61-63.

以上から、「文明（技術）が進歩すれば、文化も進歩する」として、被還元性がより低いからこそ文化の進歩（進化）を、政治、商、技術、経済、生態、法律への架橋として考えることが文化資本論の目論見であるといっている。5 (6) フォース・モデルを超える戦略マーケティングがリフレーミングされようとしてきたが⁽⁵²⁾、この点はさらに反映されることだと考える。

第3には、様相論理が入る可能多世界意味論の展開として、個体論にはつぎの2つの立場があるとして、経営学やマーケティングでもやおら引用した者がいるにはいたサンドイッチ説とソーセージ説への言及がなされていた⁽⁵³⁾。①「言語に依存」し個体を問う立場（[相關的]意味論的機能分析的解釈説）。②「言語とは独立」に個体を問う3つの立場（貫世界的個体同一性懐疑論、貫世界的個体延長論、貫世界延長個体が各世界内存在個体片の人為的重合であるとする説）。サンドイッチ説は、個体は基本的に世界内存在時間切片であり、貫世界的貫時間的個体とは、なんらかの仕方で、それらの切片個体を重ね合わせた人工物に過ぎぬという。ここでいう人工物を、人間も人間による人工物だと理学から工学に向かい最広義に解せばむしろ社会科学でも通用する一筆者加筆一。サンドイッチ作成者は、世界の所与を、スライス済みのパン、ソーセージ、トマト、オニオン等々のそれぞれの各切片個体と見るとメタファーされたこの描像では、顧客の要求や自分のアイディア等に依存し、どの切片個体同士が合体するかを問うことには「意味がないこと」になるとされた。一方、ソーセージ説は、貫世界的貫時間的連続体が個体であって、各世界片・時間片はその現れ・断面に過ぎないという。ここでは、上記の切片個体の作成者は、それら各々の塊を世界の所与と見做すとメタファーされた描像になる。そして、要するに、直示語が登場する単称文の表現する命題は単称命題であり、いかなる世界や時点での値踏みにおいても、このすでに現実世界で確定された同一の単称命題についてその真偽が問われるということだけが、重要だとされた。このことからしても、デジタル化により返って見える化している循環性が進展しようが、そのいずれの説にも加担しない半システム性(C₂)を如実に突きつけるトランスベクション考が、今こそ重要になる。

そして第4に、存在相（[実在例化]子）、認識相（[意味]子）に、時間を入れて様相（子）を付加する次稿以降で述べる行為と構造についての4大説総合以後は、現実化するまでの間にこれ以外は存在しない選択肢として生成する理念／規範だとして、つぎを擁護するものである。① [理論上にはなく] 実践上にもみある自由。これは、ひとまずいえば「主意—決定論」が終焉するところの「合」に向かう社会的相互「承認—理解」過程における「納得」律である。② 進歩。これは、「制約された—促進された自由」の「真／偽」の漸近的解明と「普遍／個別」な原理探求との相乗性の暫定である。そして③ [科学] 技術。これは、体内に侵入したシアノバクテリアの機械バージョン（I [C] T, IoT）があり、「身体外 [在] 的進化」という素朴な内外境界化による表現自体を無効化した。「様相—時間的区分を入れない ψ （存在相／認識相）」₂ から、存在論的に自動・自存（ただひたすらそうであるだけ）であり包披の反復が成り立たないC₁の「無 ψ の様相₁」—無とはいつて

(52) G.S. デイ／徳永豊ほか訳、1998年。

(53) 野本和幸、オンディマンド版2014（1988）年。様相論理については、165～238頁、個体論については、215～225頁、322～326頁。以上に基づく。

も ψ の発生・発現に対する潜在・メチル化、様相的に「必然は必然、偶然は偶然」という意味で最大限にロバストな事実—と「無様相の ψ_1 」、そして認識論的に他動・意存であり相互に凌駕を繰り返しながら包皮の反復が成り立つ C_2 の「有 ψ の様相₂」と「有様相の ψ_2 」がでる。というのは、メガラ派的現実主義者（存在論的な「在」の一価説）を否定し、大多数の者が現実にはではなく可能性としてだけ存在することを認めるだろう（今はない実在いわば創発的実在、「不在」の中立選択説、エピジェネティクスへの哲学的援護といえよう）という。たとえば、「～学科目」が現には未設置でも、当該学科目の開設能力があればそれは様相論的に存在していることになるからである。以上の偏に人類学由来ではない論法⁽⁵⁴⁾は、本論法をいい始めた拙稿⁽⁵⁵⁾以降と親和的である。

ψ は、「経験／現実／絶対的確認が不可能である超越」という 3 ドメイン（相）に「今ある実在」である。 ψ に時間区分を入れ、外 [在] 的關係にある C_1 と、相互構成的な内 [在] 的關係にある C_2 の、CC を成り立たせるような蓋然性（「客観—信念や楽観や悲観を動機化する主観確率」）として「なんで在るか」だけではなく「いかにして、いかなるものとして存るか」という問いを重視すれば、これに答える理解が先の個体論と共鳴し、つぎを超えて必要となる。①現実空間は可能空間から選択される⁽⁵⁶⁾ので状況整理が不十分になり、可能なモデレーターが議論されないこと。②一定時間長の民主的構成上で、3 タイムゾーン（直近状況を重視する、現在を無視し過去を重視する、現在も過去も無視し現在行為がもたらす結果を重視する）× 2（ポジティブ要因に注目する、ネガティブ要因に注目する）という 6 タイムゾーンの時間展望が意思決定に影響すること⁽⁵⁷⁾。

さても、市場（多様性）原理だけでは説明がつかない多様性（市場）原理を露わにしている現実（「経験₂—超越₂」）がある。デジタル・ネットワークが拡大しているそうした現実では、「行為—制度₂」における行為者（制度設計者）を超える行為（制度）が、パンドラの希望として、自（他）己をさらに再帰化している。多様性は、つぎにかかわる。① [不] 在 / ② その [不] 在への否定的制約 / ③ そしてその制約の [不] 在化。様相子を付加しないメガラ派は上記②に限定された多義性を、様相子を付加する非メガラ派は上記①②③に亘る多義性を問題視する。そして、ある関係項がその他のいかなる関係 [性]（多義性）も重要だと見做せばインクリメンタリズム（進化の連続平衡論）になり、それに抗えばラディカリズム（進化の断続平衡）になる。以上から、「A— (=) 非A」の両項とくに無徴項側を契機とする脱構築には、つぎの点で、果たして「自然性」があるのかと問われる。①言語表現の能記接地的一義性における意味の不成立化、②多義性の統語による意味の再成立化、そして③「相関主義による意味論的エンゲージメント（接続）—非相関主義による意味論的ディスエンゲージメント（切断）」。つまり、その対象にありそうな「残余」を単に求めるだけに終わらぬよう求めて対象を判断した—その求め方には残余はあるが—のならば、それは CC をより可能化する帰結を迎える。

(54) 入不二基義、2017年、30～47頁。

(55) 長谷川博、2017年3月、93～109頁。

(56) 正村俊之、2000年、83頁。

(57) P. ジンバルドール・J. ボイド／栗木さつき訳、2009年、32～67頁。

2 応用の応用論：クロス・カップリングへの確信

定説化したとの了解があれば一方で不評もかかっているが⁽⁵⁸⁾、つぎの關係的つながりが、かつて説明された。すなわち、「救済予定説（現代の遺伝子決定論）／世俗内禁欲」をいうカルヴァン派のエートス（倫理、生活態度）と「『変換₂—交換₂』／『事前₂—事後利益₂』における分岐」がある近代産業経営化的な資本主義精神とのつながりを示す説明のことである⁽⁵⁹⁾。今更にこうもいうのは、その説明と、ゲーム理論におけるパラドクス中のパラドクスといわれる「ニューカム・パラドクス」の説明との類比を触媒とする「資本主義のその先」への言及⁽⁶⁰⁾があったからである。ただし、競働と協働に関する諸学の守備範囲が伸縮を繰り返す根底には、後述する〈和〉についてのDC解釈ないしCC解釈にとっての射程範囲があり余る。そして、上記の説明が因果性というよりは「親和性⁽⁶¹⁾」（おそらくは「原因₂—理由₂」）をいった際と同様、またや閑却された回帰面が、希望的観測などの不整合を目の当たりにした現実₂に事実としてある。よって、つくられた歴史への批判があり⁽⁶²⁾、過去に見捨てられた（破壊された）のか埋没史の「再」発見が学問（「哲学₂—科学₂」）発展につながるのであれば、現実上での「自由／民主」の捉え方に影響する「様相」（図5）が、「回帰に伴って変わる」ことがあると思ひ知る。ゆえに、指摘済みの「中動態／中観」への回帰には、「結果（成果）の変幻に対する帰結」を変える意義がある。

また、民主主義のその先への言及⁽⁶³⁾がある。そのうちでは殊につぎが、筆者の意識に粘着する。①「事前—事後平等」、②「社会契約—保険プール」、③「多数決—パートナーシップ原理」。というのは、上記3点は、資本主義取引がより目的や要求に合致するための制度論にとって補足的に、「自己—他己」を超えていう「誰にも属さないがすべての人に属すこと」（「もっと自由を」といい合う事実上のパラドクス）を内包したつぎにとっての通過点になるからである。①各人に正當に帰属している資源に基づき各人が「禁欲—欲求」することについて、陰（陽）に「義務束が自由—権利束が責任」と陽（陰）に「権利束が自由—義務束が責任」—たとえば、社会契約か保険プールかで陰陽が逆転する—があるが、取引当事者の双方がアトミズムでなければ対話による分極化は理想に固執しなければ論理的にはなく、他者の思考との關係によって思考の同一性が部分的に規定できる。②社会科学がデータに翻弄されないというにも⁽⁶⁴⁾、それは、可謬性がある「被験者—験者」の「コンセプト（倫理／道徳、

図5 様相

	存在しないことが	存在することが
できない	必然（本質）	不可能
できる	可能	偶然（偶有）

(58) 大澤真幸・稲垣久和、2018年、70～111頁。近年ではたとえば以上がある。

(59) M. ヴェーバー／大塚久雄・生松敬三訳、1972（1920～1921）年、10～13頁。M. ヴェーバー／大塚久雄訳、1989（1920）年、289～371頁。

(60) J. P. デュビュイ／森元庸介訳、2013（2012）年、171～242頁、243～264頁。以上への違和感は、以下に触れていればさほどないだろう。I. ウォーラーステイン／川北稔訳、1985（1983）年。

(61) M. ウェーバー／武藤一雄ほか訳、1976（1922）年、123～125頁。

(62) F. L. ランケ／林健太郎責任編集、1974年。

(63) R. ドゥオーキン／水谷英夫訳、2016（2006）年。たとえば以上があるが、「尊厳—自尊心」／「安全—名誉」、「小さな政府—大きな政府」／「分配格差—公正を象徴する増減税」にも言及している。

行動理念／活動規範—非コンセプト化」行為における、「ハザード」（「自己決定あり／意図した結果」, 「自己決定なし／意図せざる結果」）と「リスク」（「自己決定なし／意図した結果」, 「自己決定あり／意図せざる結果」）についての可疑性の処理次第になる。なお、「リスクとは自己決定に基づく行為の意図せざる結果⁽⁶⁵⁾」であるという場合があるが、本論では上記のようにリスク概念を拡張した。ともかくセテウス船的存在である自（他）己のデータ有効期限は、よくてもその場限りである。そして③価値とは、出来事因果をもたらすただならぬ間主観としてどうやら制度化された（る）のか、行為者因果をもたらす主観であるのか。とまれ、「必要（正選択）—不必要（負選択）—留保（中立選択）」／「善（正）—真」における価値評価は証明できない（不可能性定理の至当）が、諸学説等の一定の価値観点や価値解釈を寛容することが「価値自由／価値進歩」である。

以上の重さがある「道理／公理系」の形式進歩の余地を、「科学上の真理でさえ制度である」といった構造論の提起は「真理₂—制度₂」をいったのだとすれば尚更に筋が通るとして、必然的に埋めるものがDCである。よって、C₁（2元許容論化）に前後して関係するC₂（「多元／1元許容論」化）を中間帰結とし、「競覇—非競覇原理」からの飛躍（均衡の破れ）に首肯しつつ、やはり[ポスト]資本主義論⁽⁶⁶⁾のその先をみる。1（多）なる多（1）の捉え方として「競覇—非競覇原理」をいうために、価値自由とはいえ論争上の的となる「7±2」?の事実無根ではないバイナリー・コードを選択し帰結を示すことで〈介入〉（「統治₂—自治₂」）が正当化される。中間帰結とは、「短期—長期」にある2重偶有性をあたかも先験的に先取りしたかのような意思決定上の中期〔経営〕計画に引き戻していえば、対称性が破られる均衡として目度ささも中くらいなりな「社会的意義」である。その限りで、特定〔「戦略的」共時—通時態〕を基準に考えても無駄ならば、これに縛られない「短期／長期」という意味合いで「行為—制度」の新局面原理を取り出すCCという過程が、社会的に相互承認され回転計画化の実効性を引き出す。その過程につき纏うのは、「パラドクスは過程〔モデル〕の価値についての最も説得力ある証拠⁽⁶⁷⁾」なのだということである。

そこで、ネオⁿ・プラグマティズムが吸収する少なくとも下記の諸論間関係を射程範囲とするのは、「あなたとあなたの環境があなた⁽⁶⁸⁾、どうしていたのよ」における「物理現象—意味現象—生得的で思い通りにならない—価値判断に基礎を与える—〔眼前の〕状況に対応する—行為選択する」への行論上でむしろ最短経路に照準を定めたくなるからである。諸論間には、素朴实在論批判であるラディカル構成主義を極とする「相関主義的媒介説」と、これを批判する「非相関主義的接触説」に大別できる関係がある⁽⁶⁹⁾。前者は、「内〔在〕的—外〔在〕的世界₂」にある「内₂」のループや「外₂」のループ、そして「内₂—外₂」

(64) D. ピンク／大前研一訳、2015（2010）年。以上を踏まえる。

(65) ルーマンの弟子たちは、ルーマンの「リスク—ハザード」概念を以下において解説した。C. バラルディほか／土方透ほか訳、2013年、303～306頁。

(66) I. ウォーラーstein／川北稔訳、前掲書。Wallerstein, I. 2004.

(67) G. ハーマン／山下智弘ほか訳、2017（2010）年、192頁。

(68) J. オルテガ／A. マタイス・佐々木孝共訳、1968（1932）年、26頁。「私は、私と私の環境である。そしてもしこの環境を救わないなら、私は一筆者加筆—私をも救えない」というが、実在をそれを見る主体に還元する観念論と袂を分かっている。

(69) H. ドレイファス・C. テイラー／村田純一監訳・染谷昌義ほか訳、2016年。

のループがある場合にそれら以外はないという。一方の后者には、その相関に「外₁」が回復的にかかわるといふ思弁的実在論以後と、その相関に「内₁」が回復的にかかわるといふオブジェクト指向存在論⁽⁷⁰⁾(\square 実在論的社會存在論)がある。オブジェクト指向存在論は、「実在も非実在も等しく対象である」といふことを事実として方法論的關係主義(「個人主義₂⁽⁷¹⁾—非個人主義₂」)に突きつけ、そうした対象を存在論で説明しようとする。

個人主義(アトミズム)と非個人主義(ホーリズム)のいずれもが、それぞれに「もっと自由(進歩)を」と周知な2様にいい合い続けてきた。だからこそ、つぎの①がでていたのだが、その後としては②がでたことに着目する。①既述した「権利—義務」／「自由—責任」について抜かりなく、多様な目的を実現するため「等しく用いられる個人主義と非個人主義(設計主義)」を横断するあらゆる現実を言表すべく再定義されていた「コレクティビズム⁽⁷²⁾」、②上記①に吸収される両者—後々のものだが加速主義⁽⁷³⁾もここに例外ではない—の残滓に囚われるあらゆる現実があつてないと言表するための「アセンブリッジ」。これは、歴史的固有性を創出し安定させる過程としての集合体であり、年齢、性別、宗教といった人間のさまざまな自然の姿(性質)を超えたところにある異質な諸項(関係)から成り、それらの間のリエイゾン、諸関係を定める多様体であるとされ、ドゥルーズの集合体論(『千のプラトー』)を踏まえ、「コード—脱コード化」／「同一性的安定(『領土』)—不安定化(『脱領土化』)」／「物質的—表現的機能」の3次元からなる集合体論2.0だと言ふ⁽⁷⁴⁾。

そのコレクティビズムは「存在論的であつて認識論的でない」、そのアセンブリッジは「存在論的になくて認識論的にある」と捉えられ、今後も微行するだけでいいのか。たとえば、コレクティビズムは、素朴な位相(一人一人の経験に所与化した先験的カテゴリがいう「AがAであるための最低限条件」)の変換による閉曲線—素朴の洗練限界にある位相ならばそもそも閉塞するよう差し向けられている—のような構造共有が帰結になる。アセンブリッジは、内部(外部)の内部(外部)は外部(内部)というような包披論的形式の構造共有が帰結になる—上記①の閉曲線について散々いつてきた実践的閉塞突破論が打つても響かなかつただけとは決して言い難い—。これだけではネオなのかニューなのかよく分からないだろうが、このアセンブリッジ論の共生(シンバイオシス)論としてのニューネスについては後日に述べるとするが、そのコレクティビズムは、DCにおけるC₂を考え進めるための「回帰」に足る。それには、これが半ば「悪しき新しきこと」とされた期間以後の情報フロー化はあつたが、それこそ情報をストックするために、つぎの指摘を踏まえなければならない。すなわち、「ある命題(P)と矛盾するものやそれと反対のPを信じることから、もともとPを信じないことが帰結する、という考えには同意できない。互いに矛盾する複数のPを信じることが可能であり、その矛盾が容易には看破できない

(70) G. ハーマン／山下智弘ほか訳、前掲書。

(71) Nagel, E., 1961, pp. 535-546. 方法論的個人主義については以上も参看されたい。

(72) Hayek, F.A., 2001 (1944), pp. 33-44. 以上に基づく。

(73) A. R. ギャロウエイ／北野圭介訳、2017 (2004) 年。N. スルニチュク・A. ウィリアムズ／水嶋一憲・渡邊雄介訳、2018 (2013) 年、176~186 頁。

(74) Delanda, M., 2006, pp. 1-25. 2016, p. 1. 以上に基づく。

微妙な場合だけでなく明白な場合でもである。しかし同時に、あからさまな矛盾を信念／動機として帰属させることは、誰に対しても控えねばならない。ここでくれぐれも必要なのは、矛盾する複数の P を信じることと、その矛盾を信じることを混同しないことである。つまり、前者は『 P と信じかつ P でない信じること』であり、後者は『 P かつ P でない信じること』である⁽⁷⁵⁾。

それら自体それぞれに矛盾があり微妙あるいは明白に3点動化する「資本—自由—民主」を、前者（「 P と信じかつ P でない信じること」）の例化とすれば蛇足に過ぎようが、つぎがトランスベクション考では見逃せない例化になる。普遍主義と排外主義ではなくともレーシズムとは矛盾するが、資本主義がグローバルに第1優先されてきた限りで、結構これまで両立されてきたではないかというホーリスティックな理解のことである。ここから、一方を徹底すれば他方を否定するに至るようなテンション関係の否定を非2元論的に強調する。そして、中動態や中観への遡りに比べればより近い過去だが、得体がしれないとされてきた創発概念がでる「全体は部分の総和以上」という存在論があり、その後「全体は部分の総和」という新しい存在論がある—諸学の諸論が交錯するうちに前後関係が逆だと思われている節がある—。そこで、これらについての科学的再考の軌跡を改めて整理するためにも、存在論の基礎概念である「部分—全体」概念をどのような強度で規定するかにより複数体系がある「メレオロジー」そして「メログラフィー」について後述する。

さて、「経験—現実—超越」₂の大いなる循環（様相）において「ある／なる」取引が、どれをどれだけ「消去する（しない）／できる（できない）」になる均衡にはつぎがある⁽⁷⁶⁾。
 ①諸当事者にとってどちらでもいい複数の均衡。②複数の均衡が諸当事者にとって一方的であることを超える、「内₁—外₁」（「鬼は外、福は内」という C_1 ）での「内₁」としてのものであるからこそこの均衡。③「リスク—リターン」／「ハイ—ロー」／「非信念的—信念的誘因」における優位の均衡と諸当事者が無知であるか無知でなくともロックインする劣位の均衡。④諸当事者の誰にも自分だけが行為を戦略的に一方的に変える誘因がある（非ナッシュ均衡）場合の「外₁」—鹿狩りは基本的には均衡外の利得がハイ & ローである—としての均衡。そして⑤コンベンションへの自然な従いに似せてつくるコンセプト化（未来も含むちがいはある）により正しい取引締結（協働）選択だと納得されることから、諸当事者の利得が実は下がるので劣位均衡ではあるが「内₂—外₂」としての均衡が1つだけある—進歩と自由の同時実現を取って意図しない流動的な考え方といえようか—。①から④では複数ある均衡選択のための調整が、⑤では非ナッシュ均衡からの「ナッシュ・プログラム」として、条件付きの協力や可能な均衡の数を増やす。ただし、英米型の自由市場型経済と日独型の調整市場型経済における市場デザイン比較や「AI(人工知能)—HI(人間知能)」₂を見通せない限り、駄目を詰めるようなヒューマン・ニッチ論に陥るだろう。そして、ある「システム₁—組織₁」が生み出した困難未解決に対し、「システム₂—組織₂」の可能性が問われる。まったく異なる「とにかく FOL(1次論理)での2つ」へと消去して基盤を成す上記のような均衡「解」（ルール、[[システム—組織交渉]] プロトコル）が

(75) D. デイヴィッドソン／金杉武司ほか訳、2007年、350～351頁。僅か変更したが以上からの引用。

(76) Guala, F., 2016, pp. 20-32. 以上に基づき一部変更。

与えられる事態を超えて考え進むには、既述のアセンブリッジのように、その2つどちらの規範からの純粋な現場に個別特殊な応用にも煮詰まらない「応用の応用」を、以下のようという—ニュートラルな既成語をうまく1つ選択できればいいが、この意図からすれば「 A_2 — B_2 」というバイナリー・コードは「 $数学_2$ — $非数学記号_2$ 」／「 $十全_2$ — $一次全_2$ 」である—ところから再考する時宜だと考える。

応用の応用では、「 $原因_2$ — $理由_2$ 」／「 $中央制御_2$ と $周辺制御_2$ 」における「 $コミットメント_2$ — $エンゲージメント_2$ 」を見据えるコネクショニストによる「 $メタ$ ・ $マネジメント$ 」が、「 $経験_2$ — $超越_2$ 」である現実のパターン変数（変項）を抽出する機能要件になる。「 $コミットメント$ 、 $エンゲージメント$ しない方がいいですよ」のお為ごかしの是非についてはUPB論⁽⁷⁷⁾がある。ただし、「 $メタ$ 『 $行動理念$ — $活動規範$ 』— $応用$ 」レベルというときにすら絶えずある行為についての「 $暗黙知$ 」の「 $実践$ — $理論知化$ 」の残余が「 $超$ 」組織に蒔かれる採め事の種であるから、部門間連携⁽⁷⁸⁾とはいうが組織内には「 $実践$ の内側と外側」が部門割以上に数あるので、メログラフィーをいうことになる。ここでいう部門は、産出機能上で計画（意図）された境界区分（通常の自己準拠域）における自己言及と、その境界導入意図が及んではいけない境界区分における自己言及とがあれば、機能向上するからである。

複数の社会的時空における「 $中間領域$ でのある粒度（私や組織）の状態—そのある粒度の状況（その相互作用行為）」の複数ループに、ある粒度の「 C_1 者」がいるところへある粒度の「 C_2 者」が入る上での、意味理解の多重相関を、「 $再帰的多重ループ$ 」ということにする。 $中間領域$ とは、存在論的に最上位の中立領域・形式レベル（「 $実体$ — $非実体$ 」）の下にある「 $感覚$ （ $知覚$ ）— $意味$ 」対象のレベルをいう。通常経験上では、同レベル上でプリミティブネスの倒錯をいい合いつつ「 $状態$ — $状況$ 」における $ディレンマ$ 抗生薬を求め「 $合理的$ 」改良主義者⁽⁷⁹⁾といわれるようになった者たちは C_1 者であり、 C_2 者とはその C_1 者の世代が生んだ $パラドクス$ 耐性者である。 C_1 者はとかく一義性に向うだろうが、 C_2 者は第一義性／多義性に向う。ゆえに、応用の応用の主体によるCCでは、 $再帰的多重ループ$ に透徹しよう、しかも C_1 者と C_2 者の粒度の差—「 AI — HI 」₂を有する人間（ $ホモ$ ・ $デウス$ ⁽⁸⁰⁾）それぞれが民として主として1対1の関係を構築できる限界粒度の大小関係を埋め（ $解$ ／ $壊発$ ）ようとする。したがって、「 FB （ $フィード$ ・ $バック$ ）— FF （ $フィード$ ・ $フォワード$ ）」₂における「 $循環$ — $生成$ — $変化$ 」に気づく過程で、どれだけ C_1 （ C_2 ）を C_2 （ C_1 ）に「 $できる$ — $できない$ 」／「 $する$ — $しない$ 」かと考え進める。

以上をいうに至り、「 $内部$ （ $状態$ ）— $外部$ （ $状況$ ）」がどう見られてきたか。ある概念フィルターでの眺め（観察）は対象そのものの内実にごとまで迫った近似なのか、いやそれこそ対象とはなんだとされていたのか。ということから、FOLもSOL（2次論理）もないと必要不十分になるとして、図6をいう。

(77) Umphress, E.E., and J.B. Bingham, 2011, pp. 621-640. たとえば以上がある。

(78) 長谷川博, 2007年, 150~153頁。

(79) 長谷川博, 1998年, 35~56頁。環境主義（SD [Gs]）における改良主義は以上を参看されたい。

(80) Y. N. ハラリ／柴田裕之訳, 2018年。合理性も再考している。

図6 「認知—非認知主義」／「内在—外在主義」における1次論理系と2次論理系

1次論理系	A ₁	非A ₁	2次論理系	「A ₂ —非A ₂ 」 がない	「A ₂ —非A ₂ 」 がある	
	B ₁	経験論的仮説 行為一般で非認知主義 道徳判断で内在主義		「B ₂ —非B ₂ 」 がない	2因子仮説	2段階認知仮説
	非B ₁	行為一般で認知主義 道徳判断で外在主義		「B ₂ —非B ₂ 」 がある	2段階認知仮説残余	分類表象・ カテゴリ仮説

「経験—AIやHIといった知性が絶対的なものに直接にアクセスできることを意味する思弁」的な[中立]選択螺旋において強化され、経験論の観察粒度も「人文₂—自然₂」によりどうやら変化している。だからこそ、形式カテゴリをいう伝統的カテゴリ仮説のデイスエンタングルメントがあるにはある。ただし、同図の網かけセル以外にある例化は、あくまでトランスベクショナル連鎖上での取引への筆者の関心によるものである。まずは、その例化についていう。理由については、究極の理由も原因もないのだが経験論的な「理由の原因化」という自然化⁽⁸¹⁾へのシフトに対して、「認知(A)—非認知主義(非A)」／「内在(B)—外在主義(非B)」における「理由の欲求信念2因子仮説」と「理由の2段階認知仮説」がある。「認知—非認知主義」については、つぎの2区分がある。①心とは外界を表象する器だとする考えを前者とし、APS(オートポイエーシス・システム)論がいうエナクメント・パラダイムを後者とする区分。②道徳判断とは何らかの実在や性質を記述している真偽の問える命題だとする考えを前者とし、道徳判断とは事実判断ではなくある種の感情表明や指令だとする考えを後者とする区分。

また、「内在—外在主義」については、上記②とセットにされる場合には、道徳判断が指令的側面を必然的に含むという考え方を前者とし、道徳判断とは自然界におけるある種の事実についての事実判断であるからその本体は記述的側面であり指令的側面は偶然的に付随するという考え方を後者とする。

自然化シフトの一方で今なお広く共有されている欲求信念2因子仮説では、行為を正当化する理由は、何事かへの欲求とその欲求に外在的(独立)な実現方法や事実に関する信念という2因子から成り、事実判断や道徳判断そのものは欲求がないと行為の理由を与えないとされてきた。しかしながら、2段階認知仮説では、2因子仮説がつぎの2段階の第2段階の一部を切り取ったものでしかなく、徳—徳にも既述のハザードとリスクがある—と行為のつながりを隠蔽し、「要するに本人がやりたかったのでしょう」と括られてしまい、人の諸欲求は集団力学のアリーナでしかなく行為主体はどこにもない、という理由の原因化(自然化)に取り込まれかねないので容易には領けないと、欲求誘導ではない状況把握依存の事実考慮による欲求喚起をつぎのようにいう⁽⁸²⁾。①いかに生きるべきかの捉え方の下で、諸事実についての個別的な知とその時の関心が擦り合わされ、状況の捉え方が析出

(81) D. ヒューム／大槻春彦訳、1948年、120～275頁。因果関係論史上で著名な以上に端を発し、以下以後に顕著になった。D. デイヴィッドソン／服部裕幸・柴田正良訳、1990(1980)年、2～28頁。ただし、以上のような物理主義的な因果関係論とは逆に、以下では心身の因果関係が原初的な因果関係だというM. ピランの説への言及がある。北明子、1997年、勁草書房。

(82) J. マクダウェル／大庭健編・監訳、2016(1998)年、1～101頁。

し、事実のある特徴がせり出してくる。②そのようにせり出して知覚される事実と、その事実と照らすと重要になってくる関心が合わり、ある行為の理由となる考慮を形成する。

そうしてみると、「認識（「合理—経験」—存在（「実在—『観念／唯名』」）論」の「競働—協働」／「代替—補完」について、「パイのゼロ和（ここでいう和とはシステム論でいう総和）—非ゼロ和（総和未満，超総和）」をどういふかは、「人文科学₂—自然科学₂」のつぎの5争点に起因している。①批判的実在論にしる批判的唯名論にしる、逆に鬼門化するほどに「道徳」感情に影響をもつ4類型化等のすべての文化を、そうは真に受けない。近代以降西欧化では科学技術の援護により「ナチュラリズム」優位に事物が運んだ。それにつれ、つぎの流れでゼロ和を生んだのか。「人間に宿る技能（スキル）—物質に宿る技術（テクノロジー）」／「専門—教養」→「非3R（[理念化する]創発性，非記述的有意味性—たとえば環界論や「中国語の部屋」⁽⁸³⁾における感覚／知覚から意味へ，量子論的認知論についての是非⁽⁸⁴⁾，意味の実在性⁽⁸⁵⁾—反証不可能性）—3R（還元性，記述的再現性，反証可能性）」→「理論—実践」／「スペシャリスト—ジェネラリスト」。「中国語の部屋」という「状態—状況設定」では、感覚／知覚する自動翻訳機械のような存在は、中国語の意味を理解していないといっている。②普遍性・普遍者（セテウス船のような変化する事物の同一性）を認めない唯名論については、批判的実在論として目下有力なトロープス論⁽⁸⁶⁾でも逆に単体対象とは何かとなる。ここは少々長くなるが、トロープス論から、「内—境界の縁—外」についてFOL系内的デマケーション次元での反問に継ぐ反問に対するSOL化がでて、東[の列]説が諸説に比せば乗り越えるべき課題は少ないと見做されている。ただし、東説には、普遍的存在の東をいう実在論と逆に経験主義的伝統面にもある個別質の東をいう唯名論がある。たとえば、バスタブ程度量の秘伝ダレは注ぎ足すうちに3年ほどで名ばかりの存在になるがその名こそが実在だ、あるいは大量生産量の商品レベルという品番管理対象アイテムの品番には2つとない数的同一性があるのでそのアイテム・ブランドよりも品番こそが実在だ、とするのが唯名論である。よって本稿では深く立ち入らないでおくが、以下など各変項セットの身分が存在論的に問題視されている。「モノ（コ外延的延長を持たず存在依存がない実体）—コト・非モノ」／「外延的延長を持ち存在依存（xはyに存在依存する⇔xが存在するならyも存在する）がある実在—非実在」／「個（単）体（C個別者）—集合体（複合体）」／「コア—フリンジ」／「[個別質としての]本質（1次性質，既述の身体説，記憶説，心理説等を反映した本質6説など）—遇有質（2次性質）」／「担体に存在依存しない共通質（関係質）—一切の性質から独立な非質的同一性・基体」／「絶対—相対」／「必然—偶然」／「非確率—確率」。よって、本論が包被論を言ってきたように批判的に普遍者を認める批判的実在論の軍門に下っているという見方が暫定的にせよ大勢であり、様相論を呼び覚ます。③その一方で、批判的実在論では、実在論と存在論的観念[連合]論の論争ないし認識論の論争については、

(83) J. R. サール／山本貴光・吉川浩満訳，2006（2004）年，123～138頁。

(84) L. サスキンド・A. フリードマン／森弘之訳，2015年。以上では、直観できる範囲での古典的力学よりも小さな物体を記述するにはビットに対するキュービットという新しい論理基盤を必要とするという。

(85) 意味論的実在性については、次稿以降で述べる。

(86) 以下などがある。Ehring, D., 2011. 内在，本質，関係等については次稿以降で再述する。

C₂化されたとしかいいようがない状況である。④「出来事—個人モードの行為者因果論」にせよ、より客観的とされる原因と結果やより主観的とされる理由と成果をそうは真に受けない〔認知〕科学、また微妙にC₂化していた素朴動機論から明白にC₂化する洗練された動機（それでも「せり出し」がない「原因₂—理由₂」）論があり、決定論（ \square 動機が関係なくなる〔擬制的〕予定説,〔非擬制的〕カオス論）と非決定論の両立論と非両立論がある自由論を呼び覚ます。そして⑤本来的に2重偶有性を含む「2重様相性」から、「合理性とは演繹的推論に支えられたことだ」ということに根深い〔偏向的〕同化への批判論を呼び覚ます。原理を正しく適用しさえすれば、事実のある側面がせり出して知覚される過程やその共有という実践の内側が無視されたままで、おこなう理由のある行為が一通りに定まるかのように考えられてしまう。このように、合理性が〔社会的〕原理からの演繹と同化されるなら⁽⁸⁷⁾、実践的判断は、実践の外側から説明できるかのように思われるというわけである。

AがBに還元されることはなくとも、Bの違いなくしてAの違いはあり得ないという随伴現象が社会的存在にはある。それでは、C₁者がBでC₂者がAなのか、その逆なのか。C₂者はC₁者に随伴するというのが近代以後の通常経験だとしても、C₁者だけで21世紀に何が変わるのかと苛まれず、その逆が実はあるというに等しい「競覇—非競覇」₂（「ディスカバリー—エンカウンティング」₂）以後の原理化が、待ち構えられているように思えてならない。そこで、「インプット—アウトプット」₂におけるC₁とC₂について、C₁には「インプットもアウトプットもある」という標準化システム論（外から観察するシステム論）による領道を含むが、C₂には「インプットもアウトプットもない」という標準化以後APS論（対構造を拡張した構造カップリング）を含むネオ・サイバネティクス論による領道を含むことについての理解が問われるわけである。紛らわしいだろうが、自己言及に際しての「自己準拠あり—なし」—「内部の内部が外部」というときには、ひとまずは自己準拠なしの自己言及だと思われようか—という区分は、APS論を理解する上で必要になる。つまり、よく見てこそその現実に囚われず、「C₁（ \square 素朴実在論, サイバネティクス, トランスヒューマニズム, 非相関主義)—C₂（ \square APS論的な構造カップリング論や基礎情報学的なHACS論⁽⁸⁸⁾などのネオ・サイバネティクス, 広義相関主義)」のC₂であるCCによる社会的実在が、「汎用—専門（応用）」／「AI—HI」／「強い（心がある〔ように思える〕)—弱い（心がない〔ように思える〕）」により、高階（無限後退）化せず、より実効化することについてである。

救済予定説の審級というべき神—この神には新しい心はなかり—ではない者を「皇帝」と形容し、その新しい心—逆にいろんな心もてることになる—を「生命—非生命」からいって、「強いAI」という表現がなされた。よって、典型的なC₂問題（中動態や中観, 対構造や接触, 2重還元や2重創発）を落とし込むに際しては、AI化に託せることは託しながらも「『ない』とは証明できないのだ」と逃げないHIのバージョンアップ（進歩, 進化)—社会科学が探究する真理は、たとえば「社会₂—自然₂」の制度にあるということ—による「記述／規範的操作」の必要がある。よって、以下のことへの考えの進め方は、

(87) J. マクダウェル／大庭健編・監訳、前掲書、274～275頁。

(88) 西垣通、2004年、2008年。

ますます排去できないとなる。「形式論理の記号体系に否定演算子が含まれるならば、いかなる矛盾をも真としないときには無矛盾であるといわれる。ゆえに非形式論理の場合では、いくつかの矛盾命題を真にする一方で、すべての矛盾命題を真にしなければよい。ただし、そのように言えば、不整合だとなる⁽⁸⁹⁾」。

「極小—極大」の包摂論は、「構造循環論—生成論—変化論」のいずれにもその他を説明する上で不可能性があるという「トライアッドのトリレンマ」という「行為—制度論」のレビュー（おぼい）域を、どう出て行くのか。理論にも実践にも有る C_1 化や C_2 化では終わらないCC的行為へ向えば、第3共同体やアセンブリッジにおける「私はもはや私ではない、ならば何が私か」という自覚の差がそもそも内と外の「解釈／受容」度合いの差を露呈する。よって、社会的原理はある同化からの要求がより一般化されるときでも個人が特定の自己利益を追求できる行為と両立できる区域の限界が、改良主義が通用する限りいつでも捨てられるとされてきた規範の上限である。そして、その上限は、自然化寄りの科学技術的判断への同化、非自然化寄り推論（理由律）上の倫理的司法主義への同化の限界から、消極的自由を誘発するものである。そこで、コンセプト化が主要領域となる自由論と決定論の両立を可能にする制度論—たとえそれが、生命維持のためにのみ存在する相互〈依存〉の事実が公的重要性を帯び、ただ生存のみに結び付いた活動であろうともについても—は、「局所—大所性」としてのつぎのそれぞれの欠性をどう考え進められ[てい]るのかとなるのはやむをえない。①真理値をもつとされている価値グループの認知、②対立2項の一方を認めても他方を排去しない穏健（当）さへの寛容、そして③モデル化の是非にかかわる「オポチュニズム—ロイヤリズム」／「ニヒリズム—ユニバーサリズム」。

それはそうとして問題は、「認識（合理—経験）—存在（実在—「観念／唯名」）論」には個別化されたカテゴリ間で架橋できない裂け目ばかりとは放棄しない—裂け目という強迫観念に囚われ過ぎず、改良主義の限界を超えた現実の動きに隠退する実在には届かないとしない—「基礎論のバージョンアップ」が、いえるかどうかである。そこで、社会科学にとっての批判的実在論（コ科学実在論）では、つぎの3つの2重性があるとして〈対象〉に臨む、ということをも銘記されたい。①「メレオロジー₂⁽⁹⁰⁾—メログラフィー₂⁽⁹¹⁾」。メレオロジーは全体に包含される部分および部分相互の関係をFOLで考えるが、メログラフィーは部分と全体の相互包摂状況をSOLで考える。通常集合論という要素に対して、前者には「複合体的対象の存在を認めないという意での『狭義ニヒリズム』と複合体的対象の存在を認めるという意での『狭義ユニバーサリズム』」があり、後者ではさらに「ひとつの全体のどの部分も他の何かの一部である」という要素の捉え方をして、組織の要素は個人ではなくその行為であるという捉え方の考察を基礎論的に深めている。②「テレオノミー（自然科学上の目的律）₂—テレオロジー（社会科学上の目標志向である目的論）₂」⁽⁹²⁾。文化によらない情報伝達体系⁽⁹³⁾と文化との共進化モデル以後を踏まえる意義が再想起できようが、前者か後者かという区分上の何らかの情報が入り込む程度に応じて[非]恣意

(89) Q. メイヤスー／千葉雅也ほか訳、前掲書、131頁。以上に基づくが、次稿以降でさらに述べる。

(90) 齋藤暢人、2014年、巻末3～39頁。メレオロジーの論理学については以上を参看されたい。

(91) M. ストラザーン／大杉高司ほか訳、2015（2004）年、47～63, 260～266頁。

(92) Mayr, E., 1988, pp. 24-65.

性が追究される。情報理論の閉鎖的プログラムは社会学理論が行き着くとも言われた生物理論の遺伝子プログラムと、情報理論の開放的プログラムは生物理論の身体的プログラムと厳密に同義であり、人間〔の身体的プログラム〕にはテレオノミーとテレオロジーの2つがある。そして③「〔全〕歴史—〔全〕未来過程」₂による対象の被規定性。いつの現時点においても前者は「区別できること」だろうか後者は「区別できないこと」だろうかとなるが、それは私（あなた）たちが居るとされる環境にはストレイタム創発（跡づけと先回りがある系統上での4次元の層毎的な創発）を含んだ無限ループ構造があるといわれるからである。このことについては、既述の「FB—FF」₂に、たとえばつぎがあるというだけで、もう十分だろう。「己が〈生〉を得る前の己が『生』—己が〈死〉を得る前の己が『死』」₂／「本質（必然）—偶有（偶然）」₂／「対自—即自」₂／「命がけあり—なし」₂／「かけがえあり—なし」₂／「確実な情報に掻き立てられない—不確実な情報に掻き立てられる」₂／「再投資を考えない—考える」₂。

おわりに

直上記の①や②や③の貫入を疑すには、「人文—自然—社会」₂においていうところの、「自然₂—社会₂」である人文科学、「社会₂—人文₂」である自然科学、そして「人文₂—自然₂」である社会科学というそれぞれの最先端での境界もつれ（「学際—超学際」）を引き起こす。とくに「行為（「行動—活動」）—制度（「制約—促進」）」₂／「自由—進歩」₂の審級を探究する社会科学の最先端では、少しでも何かに近づくことが必要ならば、そうならざるをえない。「テレオノミー—テレオロジー」／「メレオロジー—メログラフィ—」からは、〔生物学／化学／物理学的に厳密な〕原因と〔信念などや、生物学／化学／物理学的にも何故か整合を生む〕理由という⁽⁹⁴⁾、2つの「形式—内容」がでる。そして、今後においては、マーケティング・アズ・コンステレーションの焦点に言及した上で、3層（「中立—中間—作用層」）化やコンセプト化に言及していく。

〔引用参考文献〕

- Bhaskar, R., 2008, *A Realist Theory of Science*, Verso. (R. バスカー／式部信訳, 2009年, 『科学と実在論：超越論的実在論と経験主義批判』, 法政大学出版局)
- Clarke, B. and M.B.N. Hansen, 2009, "Neocybernetic Emergence: Retyrning the Posthuman," *Cybernetics & Human Knowing*, 16(1-2), pp. 83-99. (大井奈美訳, 2014年, 「ネオ・サイバネティックな創発」, 『基礎情報学のヴァイアビリティ：ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋』, 東京大学出版会, 173~204頁)
- Day, G.S., *Market Driven Strategy: Processes for Creating Value*, Yhe Free Press, 1990.

(93) A. ダマシオ／高橋洋訳, 2019 (2018) 年。以上は、遺伝子決定論と小粒決定仮説に対するホメオスタシスからの、ソマティックマーカー仮説の提唱者でもある。

(94) ここでは、理由によって合理的に説明できる行動や活動を含んでいる。なお、以下を参看されたい。F. ドレツキ／水本正晴訳, 2005年, 4~14頁。

- (G.S. Day／徳永豊ほか訳, 『市場駆動型の戦略』, 同友館, 1998年)
- Delanda, M., 2013, *A New Philosophy of Society: Assemblage Theory and Social Complexity*, Bloomsbury. (M. デランダ／篠原雅武訳, 2015年, 『社会の新たな哲学: 集合体, 潜在性, 創発』, 人文書院)
- Delanda, M., 2016, *Assemblage Theory*, Edinburgh University Press.
- Descola, P., translated by J. Lloyd, 2013, *Beyond Nature and Culture*, The University of Chicago Press.
- Ehring, D., 2011, *Toropes: Properties, Objects, and Mental Causation*, Oxford University Press.
- Guala, F., 2016, *Understanding Institutions: The Science and Philosophy of Living Together*, Princeton University Press. (F. グアラ／瀧澤宏和監訳, 2018年, 『制度とは何か: 社会科学のための制度論』, 慶應義塾大学出版会)
- Hayek, F.A., 2001 (1944), *The Road to Serfdom*, Routledge. (F.A. ハイエク／西山千明訳, 1992年, 『隷属への道』, 春秋社)
- Hardin, G., 2007, *Nature and Man's Fate*, Kessinger Publishing.
- Hunt, S.D. 1983, *A General Theory of Competition: Resources, Competences, Productivity, Economic Growth*, Sage Publication.
- Mayr, E., 1988, *Toward a New Philosophy of Biology: Observations of an Evolutionist*, Harvard University Press. (E. マイア／八杉貞雄忠夫・新妻昭夫訳, 1994年, 『進化論と生物哲学: 進化学者の思索』, 東京化学同人)
- Nagel, E., 1961, *The Structure of Science: Problems in the Logic of Scientific Explanation*, Hackett Publishing Company.
- Searle, J.R., 1980, "Minds, brains, and programs," *Behavioral and Brain Sciences*, vol. 3, issue 3, pp. 417-424.
- Sperber, D., 1996, *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*, Blackwell Publishing. (D. スペルベル／菅野盾樹訳, 2001年, 『表象は感染する: 文化への自然主義的アプローチ』, 新曜社)
- Umphress, E.E., and J.B. Bingham, 2011, "When employees do bad things for good reason: Examining unethical pro-organizational behaviors," *Organization Science*, 22 (3), 621-640.
- Wallerstein, I., 2004, *World-Systems Analysis: An Introduction*, Duke University Press. (I. ウォーラーステイン／山下範久訳, 2006年, 『入門・世界システム分析』, 藤原書店)
- A. ダマシオ／高橋洋訳, 2019 (2018) 年, 『進化の意外な順序』, 白揚社。
- A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル／岡本賢吾ほか訳, 1988年, 『プリンキピア・マセマティカ序論』, 哲学書房。
- A. R. ギャロウェイ／北野圭介訳, 2017 (2004) 年, 『プロトコル: 脱中心化以後のコントロールは以下に作動するのか』, 人文書院。
- B. ラッセル／市井三郎訳, 1970年, 『西洋哲学史1』, みすず書房。
- C. バラルディ・G. コロン・E. エスポジト／土方透ほか訳, 2013年, 『GLU: ニクラス・ルー

- マン社会システム理論用語集』，国文社。
- D. チャーマーズ／林一訳，2001年，『意識する心：脳と精神の根本理論を求めて』，白揚社。
- D. デイヴィッドソン／金杉武司ほか訳，2007年，『合理性の問題』，春秋社。
- D. デイヴィッドソン／服部裕幸・柴田正良訳，1990（1980）年，『行為と出来事』，勁草書房。
- D. ヒューム／大槻春彦訳，1948年，『人性論（一）』，岩波書店。
- D. ピンク／大前研一訳，2015（2010）年，『モチベーション3.0』，講談社。
- D. G. マイヤーズほか／村上郁也訳，2015年，『マイヤー心理学』，西村書店。
- D. H. メドウズほか／大来佐武郎監訳，1972年，『成長の限界：ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』。ダイヤモンド社。
- D. H. メドウズほか／茅陽一監訳，1992年，『限界を超えて：生きるための選択』，ダイヤモンド社。
- D. H. メドウズほか／枝廣淳子訳，2005年，『成長の限界 人類の選択』，ダイヤモンド社。
- D. R. ホフスタッター／野崎昭弘ほか訳，1985年，『ゲーデル，エッシャー，バッハ：あるいは不思議の環』，白揚社。
- D. R. ホフスタッター／片桐恭弘ほか訳，2018年，『わたしは不思議の環』，白揚社。
- E. マイア／八杉貞雄忠夫・松田学訳，1999年，『これが生物だ：マイヤから21世紀の生物学者へ』，シュプリンガー・フェアラク東京。
- E. W. サイド／今沢紀子訳，1993年，『オリエンタリズム』，平凡社。
- F. ドレッキ／水本正晴訳，2005年，『行動を説明する：因果の世界における理由』，勁草書房。
- F. L. ランケ／林健太郎責任編集，1974年，『世界の名著 続11：ランケ』，中央公論社。
- G. ドルーズ・F. ガタリ／宇野邦一ほか訳，2010年，『千のプラトー（上）：資本主義と分裂病』，河出書房。
- G. ハーマン／山下智弘ほか訳，2017年，『四方対象：オブジェクト指向存在論入門』，人文書院。
- H. チャン／田村源二訳，2010年，『世界経済を破綻させる23の嘘』，徳間書店。
- H. ドレイファス・C. テイラー／村田純一監訳・染谷昌義ほか訳，2016年，『実在論を立て直す』，法政大学出版局。
- H. L. ドレイファス／門脇俊介監訳・榊原哲也ほか訳，2000年，『世界内存在：「存在と時間」における日常性の解釈学』，産業図書。
- I. ウォーラーステイン／川北稔訳，1985年，『史的システムとしての資本主義』，岩波書店。
- I. ウォーラーステイン／山下範久訳，2001年，『新しい学：21世紀の脱＝社会科学』藤原書店。
- J. オルテガ／A. マタイス・佐々木孝共訳，1968（1932）年，『ドン・キホーテに関する思索』，現代思潮社。
- J. コルナイ／溝端左登史ほか訳，2016（2014）年。
- J. ドルーズ／國分功一郎ほか編訳，2018年，『基礎づけるとは何か』，筑摩書房。
- J. バロウ／松浦俊輔訳，2000年，『科学にわからないことがある理由』，青土社。
- J. マクダウェル／大庭健編・監訳，2016年，『徳と理性：マクダウェル倫理学論文集』，

勁草書房。

- J. ユクスキュル・G. クリサート著／日高敏隆・羽田節子訳, 2005 (1970) 年, 『生物から見た世界』, 岩波書店。
- J. E. ラブロック／スワミ・プレブ・プラブッタ訳, 1985 年, 『地球生命圏: ガイアの科学』, 工作舎。
- J. P. デュピュイ／森元庸介訳, 2013 (2012) 年, 『経済の未来: 世界をその幻惑からとくために』, 以文社。
- J. R. サール／山本貴光・吉川浩満訳, 2006 年, 『MiND マインド: 心の哲学』, 朝日出版社。
- K. ヤスパース／西丸四方訳, 1971 年, 『精神病理学原論』, みすず書房。
- L. サスキンド・A. フリードマン／森弘之訳, 2015 年, 『スタンフォード物理学再入門: 量子力学』, 日経BP社。
- L. ダートネル／東郷えりか訳, 2018 年, 『この世界が消えたあとの科学文明のつくりかた』, 河出書房新社。
- L. マーギュリス／中村桂子訳, 2000 年, 『共生生命体の30億年』, 草思社。
- M. ヴェーバー／大塚久雄・生松敬三訳, 1972 (1920~1921) 年, 『宗教社会学論選』, みすず書房。
- M. ウェーバー／武藤一雄ほか訳, 1976 年, 『宗教社会学』, 創文社。
- M. ストラザン／大杉高司ほか訳, 2015 年, 『部分的つながり』, 水声社。
- N. ルーマン／馬場靖雄訳, 2009 年, 『社会の社会 1』, 法政大学出版局。
- P. ジンバルドー・J. ボイド／栗木さつき訳, 2009 年, 『迷いの晴れる時間術』, ポプラ社。
- P. デスコラ／難波美芸訳, 2017 年, 「自然の構築: 象徴生態学と社会的実践」『現代思想』, 45(4), 27~45 頁。
- P. ラビンス／依田光江訳, 2017 年, 『物事のなぜ: 原因を探る道に正解はあるのか』, 英治出版。
- Q. メイヤスー／千葉雅也ほか訳, 2016 年, 『有限性の後で: 偶然性の必然性についての試論』, 人文書院。
- R. ドゥオーキン／水谷英夫訳, 2016 (2006) 年, 『民主主義は可能か?: 新しい政治的討議のための原則について』, 信山社出版。
- R. ローティ／富田恭彦訳, 2014 (1988) 年, 『連帯と自由の哲学: 二元論の幻想を超えて』, 岩波書店。
- R. ローティ／野家啓一監訳・伊藤春樹ほか訳, 1993 年, 『哲学と自然の鏡』, 産業図書。
- S. ダーウォル／寺田俊郎監訳, 2017 (2006) 年, 『二人称的観点の倫理学』, 法政大学出版局。
- S. F. ギルバート・D. イーペル／正木進三ほか訳, 2012 年, 『生態進化発生学: エコーエポデポの夜明け』, 東海大学出版会。
- T. ピケティ／山形浩生ほか訳, 2014 年, 『21世紀の資本』, みすず書房。
- U. アロン／倉田博之・宮野悟訳, 2008 年, 『システム生物学入門: 生物回路の設計原理』, 共立出版。
- Y. N. ハラリ／柴田裕之訳, 2018 年, 『ホモ・デウス: テクノロジーとサピエンスの未来(上)(下)』, 河出書房新社。

- 東浩紀, 2011年, 『一般意志 2.0: ルソー, フロイト, グーグル』, 講談社。
- 池田義昭・福岡伸一, 2017年, 『福岡伸一, 西田哲学を読む: 生命をめぐる思索の旅 動的平衡と絶対矛盾的自己同一』, 明石書店。
- 石倉敏明, 2016年, 「今日の人類学地図: レヴィ=ストロースから『存在論の人類学』まで」『現代思想 三月臨時増刊号』44(5), 311~326頁。
- 井筒俊彦, 1989年, 『コスモスとアンチコスモス』, 岩波書店。
- 今村仁司, 1992年, 『排除の構造: 力の一般経済序説』, 筑摩書房。
- 入不二基義, 2017年, 『あるようにあり, なるようになる: 運命論の運命』, 講談社。
- 岩井克人, 2015年, 『経済学の宇宙』, 日本経済新聞出版社。
- 大澤真幸・稲垣久和, 2018年, 『キリスト教と近代の迷宮』, 春秋社。
- 桂紹隆・五島清隆, 2016年, 『龍樹「根本中領」を読む』, 春秋社。
- 柄谷行人・岩井克人・浅田彰, 1983年, 「マルクス・貨幣・言語」『現代思想』, Vol. 11(3)。
- 北明子, 1997年, 『メーヌド・ビランの世界: 経験する〈私〉の哲学』, 勁草書房。
- 郡司ペギオ=幸夫, 2010年, 『生命壺号: おそろしく単純な生命モデル』, 青土社。
- 近藤滋ほか, 2010年, 『システムバイオロジー』, 岩波書店。
- 齋藤暢人, 2014年, 「第3部 メレオロジーの論理学」『部分と全体の哲学: 歴史と現在』, 春秋社。
- 佐藤直樹, 2018年, 『細胞内共生説の謎: 隠された歴史とポストゲノム時代における新展開』, 東京大学出版会。
- 清水高志, 2016年, 「幹一形而上学としての人類学」『現代思想 三月臨時増刊号』44(5), 250~265頁。
- 田村正紀, 2019年, 『流通モード進化論』, 千倉書房。
- 中沢新一, 2004年, 『対称性人類学』, 講談社。
- 中村元, 2002年, 『龍樹』, 講談社。
- 西垣通, 2004年, 『基礎情報学: 生命から社会へ』, NTT出版。
- 西垣通, 2008年, 『続基礎情報学: 「生命的組織」のために』, NTT出版。
- 日本遺伝学会監修・編, 2017年, 『遺伝単: 遺伝学用語集 対訳付き』, エヌ・ティー・エス。
- 野本和幸, 2014(1988)年, 『現代の論理的意味論: フレーゲからクリプキまで』, 岩波書店。
- 長谷川博, 1998年, 「グリーン・マーケティングの発展経路」地代憲弘編著『地球環境と企業行動』, 成文堂, 35~56頁。
- 長谷川博, 2001年, 『マーケティングの世界: 事象・技法・理論』, 東京教学社。
- 長谷川博, 2007年, 「製品政策」『マーケティング3級』, 中央職業能力開発協会。
- 長谷川博, 2012年, 「社会交変換論Ⅰ: 選択螺旋と行動相互作用」, 『国府台経済研究』, 22(2), 124~145頁。
- 長谷川博, 2013年, 「社会交変換論Ⅱ: [超]組織個体記述の進化論, システム論, そして生態学へ」, 『千葉商大論叢』, 51(1), 41~61頁。
- 長谷川博, 2014年, 「社会交変換論Ⅲ: [超]組織個体記述への「認識一方法」/「形式一内容」連関(1)」, 『千葉商大論叢』, 52(1), 17~33頁。
- 長谷川博, 2016年, 「社会交変換論Ⅳ: 連関(2・前提と諸論点)」, 『Policy Studies Review』, 41, 41~60頁。

長谷川博, 2017年, 「社会交変換論Ⅴ: 間主体性行為ゾーン」『千葉商大論叢』, 54(2), 93~109頁。

正村俊之, 2000年, 『情報空間論』, 勁草書房。

山口昌男, 2000年, 『文化と両義性』, 岩波書店。

山崎正一・串田孫一, 1978年, 『悪魔と裏切者: ルソーとヒューム』, 河出書房新社。

(2019.8.10 受稿, 2019.10.30 受理)

〔抄 録〕

マーケティングの基礎を支えるコンステレーション（関連諸学の知や理解の連座配置・布置）には、基本開閉論としての包披論が不可欠だと目し、断絶の間にある流動である取引について、 n 元論を踏まえたさまざまなダブル・クロス（DC）におけるクロス・カップリング（CC）を、今はこれ以上ない説明としていう。まずは、どういう理解があれば〔マーケティングの〕世界を大まかにせよ分かったことになるかとなるので、「経験〔証〕—現実—超越」₂というDCに言及する。そして、「認識—存在論」／「形式—内容論」上のさまざまな未完を考え進め、その流動の中でより主要な移行を互いに得るということのために、2元許容論化に前後して関係する「多元／1元許容論」化を中間帰結とする競覇原理からの飛躍（均衡の破れ）に首肯しつつ、〔ポスト〕資本制論のその先へと踏み出す。